

が、世の中で痛い目にあう「誠」の「修行」によって改心に及ぶ話は（三三四頁）、「教化」の機能を果たすのは「学問」だけではないことを示している。「動揺する教化」から、多様な「教化」の可能性を読み取ることができるのではないか。

「開かれた文体」を求め、「対象に絡みついて容易に離れない納豆のような文体」を書きたいと思いつつ、そのような考え方を自省してしまう著者の誠実な姿が（あとがき）、民衆の視線にさらされつつ誠実に思い悩む近世学問の姿と重なり合い、感銘を受けた。教育に携わる現代の研究者が本書に「教化」されるところ大であることは間違いない。

（明治大学専任講師）

中野目徹著

『明治の青年とナシヨナリズム』

——政教社・日本新聞社の群像』

（吉川弘文館・二〇一四年）

鈴木啓孝著

『原敬と陸羯南』

——明治青年の思想形成とナシヨナリズム』

（東北大学出版会・二〇一五年）

岡本佳子

昨年から今年にかけて、表題にある政教社、日本新聞社の知識人たちが扱った二冊の本が出版された。早速、それぞれの本について手短な内容紹介と拙評を述べたい。

まず、中野目徹著『明治の青年とナシヨナリズム』は、二〇〇二年～一三年に書かれた政教社と日本新聞社の知識人たちに関する論文を、同著『政教社の研究』（一九九三年）の続篇としてまとめたものである。『政教社の研究』の目的が「健康なナシヨナリズム」の担い手であるという通説的な理解を一旦留保して、一つの「集団の思想史」を構築すること（二頁）であ

ったのに対し、本書は「個別の人物研究から改めて近代日本のナショナリズム像を立ち上げてみよう」（二頁）という考えのもと出版された。さらに詳しく言えば、明治二十年代初頭、外来語の「ナショナリティ」の意味を理解し、「自他に関する的確な情勢認識のもと、「日本」「日本人」とは何かを追究し、国家や民族はいかなる方向に進むべきかを模索した一群の青年たち」が提唱した「国粹主義」の声に丹念に耳を傾け、その論理構成を明らかにし、「彼らの言論活動や政治活動までを視野に入れながら、彼らがナショナリズムとして主張したものは何だったのかを考察」（六―七頁）することが本書の目的である。全体の概要は次のとおりである（紙幅の都合上、付論は第一部「付論二」と第三部「付論一」のみ紹介する）。

第一部「志賀重昂・井上円了・内藤湖南」第一章「志賀重昂における「国粹主義」とその変容」では、明治二十年代初頭に志賀が唱えた「国粹主義」の構造とその後の変容過程を、彼の実業論・植民論から探る。著者によれば、志賀の「国粹主義」とは、「国粹（Nationality）」を日本の近代化のあり方の基準と定める原理論であったと同時に、当時の状況に応じて「生産」「殖産興業」論、「政治」「大同団結」論として機能する「具体的な運動方針」でもあった（一五―一八頁）。地方農村の生産力養成を唱える志賀の殖産興業論は、日清戦争前後の状況のなかで国家的規模の「積極主義」へと変容し、さらに中国大陸における「帝国の利益線の擁護」という政府の方針に追隨し

ていく。この時には、当初の志賀の「国粹主義」にあった「ナショナリズムの思想としての固有の可能性」（三六頁）は失われていたとする。

第二章「日露戦争後における志賀重昂の国際情勢認識」では、愛知県蒲郡市小田家所蔵の新出史料をもとに、志賀が日露戦争後から第一次世界大戦後期までの国際情勢の中で日本の活路を見出そうとしていた様子を論じる。志賀は、日本がアジア主義的連帯によって白色人種と対立すれば、「社稷の存亡」（五六頁）に影響するとして警鐘を鳴らしている。著者はこの日本の「社稷の存亡」が「志賀のナショナリズムの核」であったとする。

付論二「志賀重昂の朝鮮観」では、著者は軍事力による日本の対外膨張と朝鮮支配を支持した志賀の発言の根底に、「優勝劣敗」の進化論に依拠した発想を見出した。志賀は日本の「国粹主義」と同じ論理を朝鮮人には適用しなかった、とする。

第三章「井上円了における「哲学」と「日本主義」の模索——東京の書生社会のなかで」は、周辺人物たちの明治二十年前後の日記から、思想的中心課題を模索する井上の動静を調査した論文である。

第四章「内藤湖南のアジア論」は、これまで三宅雪嶺の論説とされてきた「亜細亜経綸策」（明治三年）が、実は別の人物の手によるものであるため、内藤のアジア論に対する三宅の影響を重視する従来の見解に修正を迫る内容である。

第二部「三宅雪嶺」第一章「国粹主義」と伝統文化——「美術」と「遊楽」を手がかりとして」では、政教社の「国粹主義」が同時期の伝統文化復興運動と連動する契機を持ち、志賀と三宅がそれぞれの「美術」概念を展開していたことが論じられる。

第二章「明治二十四、五年の南洋巡航——その思想的意義」では、海軍練習巡洋艦比叻に便乗した三宅の初めての海外渡航の経緯を、史料によって跡づけている。この旅行は三宅のナシヨナリズムの展開とは関係しなかったが、遭難の危機の経験が、帰国後の三宅をして「独特の死生観」（二七〇頁）にもとづく哲学を構築せしめたと結論づける。

第三章「政教社退社一件始末」では、大正一二年の三宅の政教社退社の顛末を詳細に叙述し、一連の事件を大正期の「左右対立の時代思潮を象徴する一つの思想的な事件」（二九五頁）と位置づける。

第四章「同時代史としての近代——『同時代史』の世界を読む」は、二〇年の歳月をかけて執筆された『同時代史』に見る三宅の歴史思想の解明をテーマとする。歴史を「勢」と「人」が織りなす「発達展開」（二一九頁）と見なす三宅の歴史観には、頼山陽やスペンサー、ヘーゲルの影響があるとともに、「鋭利な現状批判」と大正・昭和初期の記述の「歯止めのない現状追迫」（二三四頁）という長短両面があったと分析する。

第三部「鈴木虎雄と陸羯南」の第一―三章は、『日本』の記

者で陸羯南の女婿であり、後に漢文学者となった鈴木虎雄の前半生の評伝である。著者が整理に関わる「鈴木虎雄関係史料」から、早熟な知識青年の思索と自己形成、葛藤と自立が描き出される。

第四章「陸羯南研究の動向——史料整理の報告を兼ねて」と付論一「ナシヨナリズムの語り方——二冊の『陸羯南』をめぐる」では、近年の陸羯南研究を紹介しながら、近代日本の「思想としてのナシヨナリズム」が「伝統思想内部」からではなく「西洋を参照するなかで形成され、十九世紀末の日本という現実と向き合うなかで主張された」（三一〇頁）ことを重視する著者の姿勢が示される。

## 二

本書は、全体として豊富な新出史料の紹介とそれにもとづく考察を中心とする。とくに、第一部第二章で紹介された小田家所蔵の志賀の独特な年賀状は、彼が「文」と行動の人であったことを生き生きと伝える貴重な史料として大変興味深い。

その一方で、第一部で提起された志賀の「国粹主義」と帝国主義との関わりをどう見るかという問題については、今後の課題に含まれることが終章で示唆されているものの、現段階での整理がほしいところであった。第一部第一章の「むすび」では、志賀の明治三四年の演説筆記を引用し、彼が進化論の「自然淘汰、優勝劣敗」の法則を「人間の道徳を根底より破壊する

もの」と見なして疑問を呈し、「弱者劣者」への視線」を獲得していることから、著者は「志賀の思想が「国粹主義」から「帝国主義」へと直結したとも考えにくい」（三六頁）と述べている。それに対して「付論二」では、右の演説を挟んだ明治三二年と四四年の文章からの引用に依拠して、志賀の朝鮮観に「帝国主義」との類似性があるとし、それは「志賀の思想を生涯にわたって貫いている進化論と地理学に依拠した発想」（八四―八五頁）が根底にあるからではないかと推察している。進化論は志賀の「国粹主義」と深く結びついているので、この点を志賀の思想構造としてどう理解すればよいだろうか。

本書で扱われた人物たちが緩やかな思想集団を成しながらそれぞれ展開した試みは、非常に個性豊かである。志賀は自らの「国粹主義」を政治経済面での「具体的運動方針」としていた一方で、明治初年に生まれたばかりの「美術」という用語に独自の意味を含ませ、日本固有の「美術的の観念」なるものの歴史的継続を主張し、それを西洋との比較にも耐えうる日本の「国粹」として唱道した。こうしたイデオログとしての顔を考えると、志賀は「感情的なものに依頼せず、あくまでも論理的に説明可能なナシヨナリズム」（三二四頁）という「あとがき」で与えられた評価からはみ出す面を持つように思える。それに対し、「国粹主義」を直接には唱えなかった三宅の場合、その壮大な宇宙哲学の中では「ナシヨナリズムも常に相対的な現象にすぎない」（三一八頁）というほど、広範な研究

を要する。終章で予告されている志賀と三宅の評伝は、このような「明治の青年」世代の「いくつかのナシヨナリズムのかたち」（三一五頁）を追いながら、分野横断的な性質をもつ近代日本のナシヨナリズム研究の中で、確かな史料検証にもとづいた個別の人物研究の重要性を高める成果となるであろう。

### 三

鈴木啓孝著『原敬と陸羯南』は、博士論文と数本の既発表論文をもとにした、著者初めての単著である。本書の目的は、「明治初年の青年」の思想形成の過程を明らかにし、「明治二〇年代に確立することになる日本ナシヨナリズムの基礎構造についての新たな理解を生み出そうと試みる」（一頁）ことにある。著者は津軽出身の陸羯南と南部出身の原敬という二人の青年をとりあげ、彼らが共通の歴史的・知的土壌に育まれながらも対照的な思想形成を遂げていく軌跡を追った。本書では、司法省法学校の同期生でありながら、これまで「考察対象となる年代も、それを取り扱う学問的方法も大きく乖離」（二三頁）していた二人を結びつけ、「陸羯南にとっては原敬の存在そのものが、自己の思想形成にとって所与の前提条件であり、もつとも重要な周囲環境の一つ」（一四頁）であり、陸の「草創期「国民主義」は原の日本国民観・国家観に対抗するかたちで形成されたという新説を提示する。各章の概略は次のとおりである。「序論」では、ナシヨナリズム研究の方法論として、歴史上

の個人がナショナリズムにまつわる言論と行動をなぜ生み出したかを、時系列的な「過程の追認」（一一頁）によって考察することの有効性を主張する。

第一部「明治初年の社会的状況と青年たち」第一章「日本ナショナリズムと旧藩」では、近年の先行研究をもとに、明治初年の「地域的断絶と階層的断絶の二つのベクトルが交錯した旧藩秩序」（四五頁）が「日本におけるナショナリズム形成の特殊前提条件」（二五頁）として重要であることを指摘する。こうした歴史的文脈の中で、原が故郷との関係を断ち切らなかったのに対し、陸には故郷への帰属意識が稀薄であったことが、それぞれの「思想の本質」を規定していたとする（四六頁）。

第二章「明治啓蒙主義の内面化——士族の超越」では、若き原敬が南部藩の家老格の家に生まれながらも士族から平民に転籍したことをとりあげ、この行為が明治啓蒙主義の「文明の精神」独立の気力「の具現化」（七〇頁）であり、福沢諭吉の「階層間差別解消論に対する原敬の共鳴」（七一頁）であったとする。

第三章「司法省法学校「放廢社」にみる結社と個人」では、明治一二年に司法省法学校で放校処分を受けた原、陸とその同志たちが、「放廢社」という結社に拠って「独立の気力」を保ち、自己形成をした様子を解説する。その後帰郷した中田実が分家独立して陸実となり、士族から平民へ転籍したことを、「原敬を媒介にした明治啓蒙主義の波及効果」（二〇二頁、傍点

省略）であったとする。

第二部「原敬の思想形成——あるいは「多元的の日本国民観」の成立」第一章「福沢諭吉の二大政党制・議院内閣制理論の受容」では、放校後の浪人生活を経て『郵便報知新聞』の記者となった原が、固定的な官民対立を超えた二大政党制理論と議院内閣制理論を福沢諭吉から受容したことを明らかにする。原は福沢から、党派間の「競争・均衡において全体たる日本国家を漸進させるという構想」（二六〇頁）を継承したとする。

第二章「近代日本における「多民族国家」的の日本観の起源」では、明治一四年の視察旅行でアイヌの人々と出会った原が、各人が「多重のアイデンティティ」を維持したまま「共時的に教育を受け、近代化」文明化、すなわち日本国民化を成し遂げるべき」（二九一頁）だとする独自の「多民族国家」的の日本観」（二九四頁）を確立したと論じる。

第二部の総括として著者は、福沢から受け継いだ「機会均等の原則が担保された競争原理」（二〇三頁）に依拠した文明化達成の志向が、原の政党政治観と「多民族国家」的の日本観」とに通底し、「多元的の日本国民観」の確立につながったと結論づける（二〇四—〇五頁）。

第三部「陸羯南の思想形成——あるいは「一元的の日本国民観」の成立」では、右のような原の思想に対抗するかたちで陸が「一元的の国民観」を形成していく道程を追う。第一章「帰郷体験と旧藩の超越」では、放校後に帰郷して『青森新聞』

に就職した陸が、地元の自由民権運動に関わりながらもそれに共鳴できず、再上京後にはこの運動を抑えようとする側に加担した過程を描写する。著者は、こうした故郷からの乖離の体験を「旧藩の超越」と理解し、それが陸において個人の「原初的・自然発生的共同体原理からの自由獲得と独立維持」（二三六頁）を意味し、陸のいう「日本」はこの結集原理をもとにしていた（二三七頁）と説明する。

第二章「国民主義」の誕生——その「東北」論から——では、明治二一年に官職を辞し、『東京電報』主筆として言論活動を開始した陸が、「奥羽」に替わる日本の一地方としての新しい地域概念「東北」の登場を歓迎したことに注目する。東北をはじめ各地方で、旧藩秩序の「階層的」「地域的」断絶を克服して「水平化」された個人が、「言論を以て根拠」とした理性的結合」（二二六頁）を成し、藩閥勢力に対抗した政治主体となることを陸は期待したとする。著者によれば、この「地方的団結」真正の政党」（二五八頁）が陸の「国民主義」の基礎である。その一方で、陸は「日本」全体の体面や利益を考えて政治参加すべき」（二七二頁）との立場から、党派間の競争を国民の分裂を招くものとして否定的に捉えており、福沢や原が信頼した「競争原理を基礎とした文明論」を認めなかったという。「結論」で著者は、「競争原理と党争を認める」「多元的日本国民観」と、それを認めない「一元的日本国民観」という二項対立が、明治二〇年代以後の日本の政治社会における伝統となっ

てゆく」（二九七―九八頁）との見解を示す。陸の「草創期」「民主主義」については、「既存の権力秩序に対する無前提な順応を唾棄し、現前の大勢流行との安易な同調を嫌悪し、何よりも「精神の独立」を己に課した青年が唱えたものだった」（二九六頁）という意義を導き出し、それが他者の支配を目的としない「自他共生の理想」（三〇〇頁）であったと評価している。

#### 四

本書は、青年期における陸羯南と原敬の接点と差異に着目することにより、陸の思想形成の特徴を際立たせた画期的な研究である。司法省法学校放校後の「放廢社」における再出発、青森と紋甕での鬱屈した時期、そして「弘前事件」をめぐる故郷の反自由民権運動との関わりなど、陸の行動と精神状況を史料にもとづいて丹念に描いた記述には読み応えがあった。このような陸の来歴に見る個性は、彼を学士中心の政教社と同一視しては気づくことができず、「明治の青年」世代の成長過程の多様さを窺わせるものである。

本書のこうした学術的価値に敬服したうえで、陸の進路決定における原の存在の大きさが実証可能な以上に強調されがちな点（とくに後半部分）をはじめ、気になったところがいくつかあるが、紙幅の都合上、次の点のみを述べたい。

陸の思想形成を主題とする第三部では、「情実」をもとにする藩閥勢力に対抗し、地方の「言論を以て根拠」とした理性

的結合」による政治主体の形成を陸が期待していたことが指摘されている。著者はこれを陸の「国民主義」全体に拡大し、陸においては「日本」という国家への帰属意識、あるいは「私は日本人である」という自己意識についても、理性的な手段によつてはじめて獲得されるものであつて、個人個人が生まれた瞬間に保持している自然の感情であるとは、決してみなされていない（二七三頁）としているが、これは性急な解釈であるとやむを得ざるをえない。陸が啓蒙主義的な「言論」と「理性」だけで自らの言う国内の「有機的な結合」が実現できると考えていなかったことは、本書の考察対象である明治二一、二年の陸の論説や先行研究で示されているとおりである。陸の政治における「競争原理」の否定に着目しながらも、「旧藩の超越」という「実体験」に重きを置きすぎたゆえに生まれた「国民主義」解釈であるかと思われる。

本書では、陸が「理性」による国家運営を諦めて「感情」による国民統合を主張するようになった時期を国会開設以後としている（二九八頁）が、実際には政論記者としてスタートを切った頃から、陸は「理性」を主軸とする「政治的生活」だけでなく、「情」と「徳」を維持する「家族的生活」をも国民形成のうえで等しく重視していた。著者は明治二一年九月二六日の論説「家族的生活及び政治的生活」の一部を引用して先述のような自らの解釈の根拠としているが、実はこの論説全体が次のような主張を趣旨としていることを見落としてはならない。す

なわち、陸は維新以後の日本で政治上の問題を「道理」によつて解決するようになったことを「一進歩」と評価する一方で、この「政治的生活」での「変動」が「家族的生活」にまで及んで伝統的な「自然の徳性」を乱していると憂慮している。さらにこの風潮が進行すれば、欧米の「十九世紀無君無父の社会」のような「我日本社会の支離滅裂」（『陸羯南全集』第一巻、みすず書房、一九六八年、五三七―三九頁）を招き、その弊害が政治にまで逆流する恐れがあると警告して、国民生活の両面の峻厳な区別を訴えているのである。陸が伝統的な秩序や価値の解体が進み過ぎることを恐れ、当初から旧来の共同体の「徳」や「感情」を国民の紐帯と見なす面を持つていたことは、彼の国民観を理解するうえで無視できないと思われる。加えて、陸が皇室を国民の精神的統合のために重視していたことを示す論説も、すでに明治二一年から登場している（『伊勢の太廟、皇室と行政府との関係』明治二一年九月二日、「国民の典礼、天長節」同年一月三日）。

こうした問題に伴い、本書で展開された陸の「一元的日本国民観」が最後に「自他共生の理想」と評価されている点、評者にはいわば現代的な価値によつてまとめられているように思われ、いささか唐突に感じられた。

## 五

二つの労作は、「明治の青年」世代のナシヨナリズムが現在

でも思想史研究者の関心を引き続け、まだ十分に史料発掘と新しい視点の導入の余地のある領域であることを示している。両書はナシヨナリズムの定義から出発せず、歴史的文脈に即した個人研究から近代日本のナシヨナリズムを解明する立脚地を築こうとする真摯な試みにおいて共通している。それに加えて注目したいのは、一九八〇年代終盤からの学際的な国民国家論の興隆を経た後に、あらためて明治二十年代のナシヨナリズムをその担い手の思想に寄り添いながら研究することの意味を、絶えず自問しなければならないと認識する両著者の心構えである。中野目氏は現段階では「結果としてナシヨナル・ヒストリーの再生産にすぎないとの誹りを受けることに甘んじなければならぬものとなってしまった」(三三三頁)と省察しながら次作の課題を列挙し、鈴木氏は国民国家批判の研究が一部では「個人の具体像」から遠く離れた「おそるべき人間不在」の歴史(二八九頁、傍点省略)を扱っていると批判し、自著がそれへの「ささやかな異議申し立て」であると述べている。本拙評は両書の意義を伝えるにはあまりに不十分であるが、ナシヨナリズム研究の視点が厳しく問われる状況に磨かれながら、「明治の青年」研究が新たな段階を切り開いていく営為は、多くの思想史研究者の関心を集めるに違いない。

(国際基督教大学アジア文化研究所研究員)

碧海寿広著

## 『近代仏教のなかの真宗』 ——近角常観と求道者たち——

(法蔵館・二〇一四年)

島 蘭 進

本書は、明治後期から昭和前期にかけて、真宗大谷派にあつて独自の仏教実践・仏教言説の地平を切り拓いた近角常観(一八七〇—一九四一)についての研究を核とし、同じく真宗大谷派の清沢満之とその門下の動きをも視野に収め、近代仏教研究に新たな方向性を見いだそうとした野心的な研究書である。二〇一二年に提出された博士学位論文をもとに二〇一四年に刊行されたものだが、資料も広く深く調べられ、論点もよく考え抜かれて分かりやすく提示されており、熟成度の高い著作と感じた。

方法的にも意欲的で、問題意識の広がり頼もしい。思想史的研究とも言えるが、テクストが置かれた実践の社会的場についての洞察が重視されており、その意味では、言説と実践の社会的的研究に接するところもある。国家と宗教の関わりやジェンダーといった視点も組み込まれていて、「テクストを読む」タイプの思想史的研究と、社会的付置のなかで宗教実践を捉えようとする宗教社会史的研究がうまくかみ合っている。それは、